2006年(平成18年)9月13日 水曜日 朝日新聞

「希望とは何ですか」

釜石市が調査対象地に

東大社会科学研のプロジェクト

「希望って何?」――。こんなテーマを調査研究する「希望学プロジェクト」に、東大社会科学研究所が取り組んでいる。急速に少子化が進み、格差社会に向かう日本で、希望を持つことの意味を探るものだ。調査対象地として釜石市が選ばれた。かつて鉄の街として発展したが、いまは高炉の火も消え、人口はピークの半分を下回る。「繁栄と衰退」を経験した釜石の人々は、どう希望を語るのか。今月下旬に本調査を実施する。

「希望学」のインタビューを行う玄田有史・東大社会科学研究所助教授(右)ら=7月、釜石市で

今月下旬 本調査 「繁栄と衰退経験」

「希望とは何ですか」

「うーん。本当に難しいですねぇ」

本調査を前に7月、同プロジェクトメンバーは予備調査をした。質問された釜石市の元助役、森真一郎さん(81)は答えに窮した。

約40年間、市職員の立場から街の変化を見つめた。現在は、シルバー人材センター理事長で、会員535人の高齢者の生きがい探しを担う。

その森さんは「若い頃は希望があったが、いまは……。なかなか昔の賑わいには戻りませんね」とやっと答えた。

同市は近代製鉄発祥の地として鉱山と製鉄所とともに栄えた。「北の鉄人」と呼ばれた新日鉄釜石ラグビー部は日本選手権7連覇の黄金時代を築き、林芙美子は小説「波涛」で釜石の街を「上海の夜」とたとえた。

だが89年に製鉄所の合理化で高炉の火が消えると、9万人を超えた人口は急減し、今年8月末時点で4万3110人。鉄に代わる基幹産業がなかなか見つからず、中心街ではシャッターを閉じた店が目立つ。多くの若者が街を離れ、人口に占める65歳以上の割合を示す高齢化率は3割超だ。

「近代日本の星だった釜石で、いまどんな希望が語られ、どう社会に影響を与えるのか。ここにこそ日本全体を考えるヒントがあると思う」

「ニート」研究で知られ、プロジェクトリーダー役の玄田有史・同研究所助教授は、釜石を調査地に選んだ理由を語る。

プロジェクトは「希望を社会科学する」として昨年4月に開始。希望という言葉の使われ方の変遷をたどったり、インタビューやアンケートを重ねたりした。

本調査は今月24~30日に実施。同研究所の学者ら約30人が、「釜石製鉄所OB調査」「農業・漁業関係調査」など9班にわかれ、街の変化をどう感じるか、現在の希望は、といった内容のインタビュー調査をする。成果は07年度に報告書にまとめるという。

玄田助教授は「苦しい時こそ、本当の希望が見いだせる。希望と挫折を味わった釜石で調査を続け、希望ある社会の姿を考えたい」と話す。

4回に分けて市民特別講座

釜石市は今月下旬、希望学プロジェクトを進める東大社会科学研究所の本調査にあわせ、「希望を持てる社会」などをテーマに、計4回の「市民特別講座」を開催する。同研究所の学者が講演する予定だ。

講座は、24日午後3時半・釜石ベイシティホテル、玄田有史助教授「若者が希望を持てる社会を創る」▽26日午後6時半・同、広渡清吾教授「女と男をめぐる法制度―ドイツと日本を比較しながら考える」▽28日午後6時半・市民文化会館、宇野重規助教授「ジダンはなぜ頭突きをしたのか―多民族社会フランスの苦悩」▽同7時45分・同、平石直昭教授「福沢諭吉の『市民』精神」。

定員は各回とも100人。事前の申し込みは不要。問い合わせは市産業政策課(0193・22・2111内327)。